

持ち帰ることをかたく決心。

それから週に一度、三島に習いに通った。3年後に秋田で父に聞かせたら、「こんな下手なのは聞いたことがない、しかし荒々しいが豪快だからこれでよい。大きな山を作りなさい」と言ってくれた。芸人と親交の深い父は耳が肥えていたのです。

昨年、この道を追求するために、17年間勤務した会社をやめ、現在は来年5月3日の大会で津軽三味線日本一を目指し、原田の東名ガード下で猛練習中です。

コーラスで知った生き方

杉本ふみ子さん(72歳)
無職 大和町

私は5年前、平均年齢60歳というコーラスを楽しみました。入会してコーラスの難しさを知り驚きました。最初の1ヵ月は歌えず、ただ聞いて勉強しました。

「アルトはソプラノ、メゾソプラノを立て、控え目に歌うことですばらしいハーモニーが流れる。自分は

控え目に相手を立てて歌うこと」と正田先生は常におっしゃいました。

週1回2時間たっぷり歌っているときは、和服に袴、靴の昔の自分の女学生姿が眼に浮かび、40数年前に若返ることができました。日常生活も心がはずみ、音楽のすばらしさを改めて知らされました。

義理人情の薄れた現在の世の中でコーラスの様にすべての人が自分は控え目に、相手を立てて世の中を生きていったならば、さぞ住みよい社会になるだろうと自分なりに考えています。



△コーラスを楽しむ人はふえています

「流浪の民」の思い出

鈴木政子さん(64歳)
農業 御殿

音痴で歌も上手でない私ですが、遠い遠い日のたった1つの思い出の名曲があります。

それはもう50年も前のことです。私の母校は^{ぼくせい}穆清尋常高等小学校、現在の吉永第一小学校です。その高等科1年のときです。裁縫室で校長先生(故飛奈先生)が1枚のレコードを手まわしの蓄音機で、高等科の生徒全員に聞かせてくださったのが「流浪の民」でした。小学唱歌だけを歌ってきた私たちにとって、何が何だかわかりませんでした。耳なれない曲に戸惑いましたが、静かに聞いていると胸がじんとしてきたように思いました。

あれから50年たった今も「流浪の民」を聞くと、あのときの母校が一つ残らず目の裏に浮かびます。私にとって、それはそれは懐しい名曲です。

国際青年年の締めくくりに朗報をもたらしたのが、田子浦青年講座の女子バレーボールチーム。全国で三位というのは、ついぞ最近耳にしませぬ。



その原動力となったのは、「頼れるお姉さま」としてキヤプテンの重責を果たした内藤さんです。スバリ優勝を目指していたそうで、周囲の「上

でき」の声をよそに、「とてもくやしかった」というのが三位の感想。バレーボールは中学生のときから始め、これまでずっと続けてきました。苦しみや喜びをとくに分かち合える



第34回全国青年大会女子バレーボールの部で3位入賞した田子浦青年講座のキャプテン

ないとうみよこ
内藤美代子さん

伝法2(22歳)